



二、人生と宗教（一）－真実の宗教－

生きることの意味

私たちが生きていく上で、悩みや苦しみはつきません。

どんなに文明が進んでも、人間の悩みというものはなくなりません。病気をしたり、事故にあったり、愛するものと死別したり、楽しいことが一つあるとすれば、その二倍も三倍も悲しいことや、つらいことを経験しなければなりません。それが人生のいつわらぬ相だといってよいでしょう。

そういう人生であっても、私たちは、毎日の仕事や生活に追われて忙しく暮らし、あっという間に月日がたってしまう。「いったい人生とは何なのか」「生きているとはどういうことなのか」と、ときどきふと立ち止まって考えようとすることもあります。けれども、それは容易に答えられる問題ではないので、私たちはそのまままた日常生活にもどってしまいます。

しかし、人間はただ生きているというだけのものではなくて、やはり「自分の生きていることの意味を明らかにしたい」という思いをもつ存在です。そこに、他の動物と根本的に異なるところがあるのです。

人間が知りたいと思うことはたくさんあります。この地球のことや宇宙のこと、自然の世界、政治・経済などの社会のしくみ、法律、国家、歴史、芸術など、関心の広がりには限りがないものです。

いろいろな学問や研究は、そうした多様なことがらについて、私たちに知識を与えてくれます。その知識によって、私たちの人生は豊かになり、快適になり、幸福になるでしょう。しかし、私たちが、

人はなにゆえに生きるのか

人生というものは何のためにあるのか

という問いについては、そうした知識は答えることができません。

生死出づべき道

宗教は、それに答える唯一の領域です。

けれども、宗教は人生の意味について、直接的に答えるわけではありません。「これこれのことが、人生の意味だ」

とか、「人間は、これこれの目的のために生きている」というように答えるのではありません。

その答えは、いわば象徴的です。しかし、その象徴的な表現のなかに、私たちがたずねようとするものの、本当の答えが含まれているのです。

たとえば、親鸞聖人は「生死出づべき道」を求めて比叡山に登られ、仏道修行に励まれました。「生死出づべき道」というのは、「生死輪廻をくり返すこの迷いの世界をぬけだす道」ということであり、それを見いだすことが、当時の仏道修行をする人たちの最大の目的だったのです。聖人にとって人生の意味は、その道の発見にあったといっよいでしょう。

「生死輪廻」というのは、仏教に固有の表現です、しかし、その表現の中に人生を見通す深い智慧があることに気づかなければなりません。

宗教と道徳

私たちが、他の人たちとともに生活していく場合に、社会生活でのルールを守らなくてはならないのは、いうまでもないことです。それぞれが自分勝手なことをしていれば、社会生活はなりたちません。そこに道徳や、倫理という問題が成立します。

その道徳や倫理の根本には、善や悪という問題があります。善いことを勧め、悪いことを避けるというのは、いつの時代でも社会生活の根本です。学校でも、道徳教育の時間があり、きまりを守るということについて、先生方が指導をされています。

人間の心には良心というものがあって、あやまちを犯すと、他人が知らなくても、自分自身がそのことについて悩んだり、苦しんだりします。

そういう良心は、生れつき人間にそなわっているもので、それこそが「道徳の根本であり、それが神や仏の呼び声だ」と考える人もあります。宗教というのは、「人間が良心にしたがって正しく生きること」にほかならないというのです。

正しく生きているなら、幸せに暮らすこともできるし、死んでもよいところへ行けると思い、善を勧め悪をこらしめることによって、世の中を正しく導いていかなければならないと考えている教育者は、今でも少なくないかも知れません。

しかし、良心のはたらきは、それが鋭くなればなるほど、「自分は間違っているのではないか」「正しくはないのではないか」と自らを責めるものであり、自分を正しい人間であると誇るものではありません。そうでなければ、かえって最も強い自己張に陥ってしまいます。道徳的な生き方というものは、そこに限界があります。

親鸞聖人が『歎異抄』の第三条において

善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや。

とおっしゃったのも、そうした人間の在り方を見通されているのです。

自分は善人だと思ひこみ、他の人を裁くということは、私たちが普通にすることですが、そこには自己についての厳しい反省が欠けています。自分のうちにいろいろな思いや、よこしまな考え、くらい衝動などがあることに気づくとき、はじめて宗教の世界がひらかれてきます。「善人は救われる。悪人は救われない」と考えるのは道徳の立場であり、そこには自分というものが抜け落ちています。

「正しくあろうとしても、正しくあることができない。悪いことを避けようとしても、避けることができない。なんという情けない自分だろう」と反省するところに、宗教への道があるのです。そういう点では、宗教と道徳とは異なった領域です。

宗教と科学

現代は科学の時代です。近代文明は、西欧で発達した科学によって飛躍的に進歩しました。わが国においても多くの病気が克服され、経済状態は改善されて、機械器具の発明により、生活は大いに便利になりました。このような科学文明の恩恵にまったく浴さない地域は、地球上でも少なくなっているといっよいでしょう。

けれども、こうした科学の発達によって、ものの考え方が大きく変わってきました。世界や人間についての見方は、

昔とはすっかり違っています。天上界に神々や天人がいるとか、地下界に地獄があるとか、人間には魂があって死後も存続するとか、そういう考えは現代人にはだんだん受け入れにくくなっています。

最近の疑似宗教には、世界の終末とか、死後の裁きなどといい立てるものもありますが、そうしたものはインチキくさいとして、一般には受け入れられません。なんといっても、信用のあるのは科学的な考え方です。実験と観察によって確立された見解だけが信ずるに足るもので、それ以外のものはすべて迷妄だというわけです。

そうした科学的・合理的なものの見方は、しりぞけるべきものではありません。それを積極的に受け入れるところに、人間の生活の進歩、発展があることは疑い得ないことでしょう。

しかし、科学的なものの見方がすべてではありません。人間には、科学の領域とは異なった領域が開かれているのです。それは、意味の領域です、人間は、事物がただあるというだけではなくて、「なにゆえにあるのか」「なんのためにあるのか」ということを明らかにしようとし、とくに人間という存在、自分という存在が、「なぜ生きているのか」ということを考えようとし、

科学的な見方が確立しつつある現在、宗教のようなものは過去の遺物で、もう何の役割も果たさないと考える人もあります。「すべての現象は、解き明かされようとしている、見える世界も、見えない世界も、人間の認識できないことはないのだ」という、楽観的な考えをもつ人も多いでしょう。

しかし、本当にそうでしょうか。私たちの前には、依然として秘密のままで閉ざされていることがあるのではないのでしょうか。たとえば、「いのち」というものです。生れることや死ぬことは、一つの生命現象として説明することはできても、自分自身の生や死は深い神秘のなかに隠されています。たとえ臨死体験をどれほど集めてみても、「いのち」の来るところ、去るところは明らかになりません。

宗教も、それを理論的に解き明かすわけではありませんが、かぎりある「いのち」を超え出る道を開こうとします。そこに科学とは違った、宗教の独自の領域があるのです。

さまざまな宗教 (習俗・新宗教)

現代のような、科学文明の発達した時代になっても、私たちの周囲には多くの迷信や俗信がはびこっています。占いやまじない、予兆、禁忌、神がかりなど、日本の各地域でいまだに人びとの心を支配している、そうした現象は無数といってよいほどのです。

多くの人たちは、それが宗教だと思っています。そして、そういう人びとの気持を利用して、不合理なことをいう「宗教らしきもの」もあとをたちません。

日本人の固有の宗教的心情は、祖先崇拜と靈魂崇拜であるといわれます。それは人間の原始の心性につながるもので、どんなに文明が発達しても、たやすくはなくなりません。誰に教えられなくても、日本人として生れたときからもっているものだからです。

仏教のような世界宗教といわれるものは、釈尊のようにすぐれた宗教的境界に達した人が開かれたもので、その導きによって人びとは、生れつきもっている迷いから目覚めることができるのです。その目覚めによってはじめて、私たちは迷信や俗信から離れることができます。

現代人は、合理的な判断によって、あやまった考え方を否定するのが普通ですが、ただそれだけでは迷信や俗信から、完全に解放されることは困難です。というのは、それが人間の生れつきの、心の在り方に結びついているからです。

本当の宗教的な目覚めによらなければ、人間は迷いから離れることはできない、といってよいでしょう。

親鸞聖人は『正像末和讃』の「悲歎述懐讃」に、

かなしきかなや道俗の 良時・吉日えらばしめ

天神・地祇をあがめつつ ト占祭祀つとめとす

と歎いていらっしゃいます。

今から八百年も前に、日時や場所の吉凶を判じたり、現世の利益を願って天神(天の神)・地祇(地の神)を崇めまつたり、占いや祭り事をしたりすることを、厳しくしりぞけておられるのです。それは親鸞聖人が、浄土の教えの真実

に立脚されているをからで、それなしには迷いから離れることはできないことが、そこには明確に示されています。

迷信・俗信の習俗に埋もれている人たちに、真実の教えを開示するところにこそ、布教伝道の出発点があるのです。それを怠れば、土地に雑草が生え茂るように、人間の心が本来もつ宗教的な土壌は荒廃し、似非宗教や疑似宗教がはびこることになるでしょう。

わが国では、あまりにも物質的・機械的な自然の見方や、人間の見方が一般化してしまいました。そのためにかえって背後霊とか、死後の世界を見てきたとか、通俗的な興味を引くようなことをいって、人びとを迷わせる者が多いのが、わが国の現状です。そうした誤った考え方に基づいた新しい「宗教らしきもの」が、次々と発生しています。私たちは、「正しい宗教とは何か」ということを、よく見極めなければなりません。

真実の宗教 —浄土真宗—

宗教といっても、私たちの周囲にはさまざまな宗教があるといいました。しかし、そうした宗教のどれが本当の宗教といえるのか、正しい宗教とは何なのか、ということをはっきり見定めなければなりません。宗教なら、どれでも良いというわけではないのです。

親鸞聖人は『数行信証』のなかで、宗教について真・仮・偽の教えを明確に判定されています。聖人によれば、真実の教えとは『大無量寿経』に説かれた浄土真宗の教えであり、それ以外のものは真実に導くための仮りの教えか、あるいはまったく虚偽の教えにすぎないと示されています。

私たちも、聖人の教えに依らせていただく以上、そのことを十分に心得ていなければなりません。それをふまえた上で、少し違った観点から宗教の真偽を判定する基準について、次のように考えることができるでしょう。

まず第一に、真の宗教には、「伝統」（仏教では伝灯といいます）があるということです。

真実の宗教は、長い歴史のなかで、多くの人たちに依り処を与え、その人たちが生きてゆく上での、大きな力となってきたものでなければなりません。昨日や今日に、誰かの思いつきによって作り上げられたようなものではなく、多くの先人たちがその教えを深く学び、それによって「生死の迷いから脱却することができた」という教えであってはいじめ、私たちをも導くことができるのです。それは時と所を超えて、すべての人の心に語りかける教えです。

親鸞聖人が『数行信証』の総序において、

西蕃・月支の聖典、東夏（中国）・日域（日本）の師積に、遇いがたくしていま遇うことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

とおっしゃっているのは、浄土の教えの深い伝統に触れることができたことを喜んでおられるのです。聖人の受けとめられた教えは、釈尊の悟りから発し、インド・中国・日本と伝えられてきた教えであったのです。

第二に、真の宗教は、「道理」ということを離れたものであってはなりません。

現在では合理的という表現をしますが、本来は「ものごとの正しい筋道」という意味で、天地万物がそれに則る「根本的な原理」にかなうということです。浄土真宗ののけ教えも、けっして道理をはずれたものではなく、智慧・慈悲円満の仏の願力に信順することによって、生死輪廻の苦悩を脱するということわりによるものです。

第三に、真の宗教は、直接的に「体験」されるものであるということです。

それは、単に理論的に納得されたり、理解されたりするというだけのものではありません。大きな悩みをかかえたり、悲しみに打ちひしがれている者の悩みや悲しみをいや癒し、それを乗り越えて行く道を示すものです。そういう力をもつ宗教でなかったら、どうして長く生き続けることができるでしょうか。

第四に、真の宗教は、「実践」的であり「活動」的であるということです。

実際に人びとにはたらきかける力をもたないような宗教は、本当のものとはいえません。ただほのぼのと自己満足に陥っているのではなく、自信教人信（自ら信じ、人を教えて信ぜしめる）というはたらきをおこさせるところに、その教えの本当のすがたがあるといえましょう。

以上、真実の宗教というものを明らかにする、四つの基準をあげてみました。それにあてはめても、浄土真宗の教えが、真実の宗教であることは十分知ることができます。親鸞聖人が晩年（八十五歳）に書かれた『正像末和讃』の冒頭に、

弥陀の本願信ずべし 本願信ずる人はみな
摂取不捨の利益にて 無上覚をばさとりなり

と高らかにうたわれたのは、浄土の教えが真実であることを確信されていたからです。

私たちも、聖人のみあとを慕って、真実の教えをますます深く学ぼうではありませんか。

学習のねらい

- (1) 親鸞聖人が歩まれた「生死出づべき道」とは、どのような道でしょうか。
- (2) 宗教と道徳や科学との領域は、どこが、どのように異なるのでしょうか。
- (3) 「真実の宗教浄土真宗」について、あなたが理解したことをまとめてください。

※ここでは注釈とルビ（ふりがな）は省略しています。